

あの話

沖縄県立首里高等学校二年 外間 凜

旧正月、シーミー、お彼岸……。その日は決まって、家族揃って仏壇に手を合わせる。幼い頃から見慣れた変わらない光景。ふと、隣に飾られた遺影を見上げる。綺麗な着物に包まれ、微笑む祖父。隣には、セーラー服を着た少年の顔立ちをした祖父の兄の姿。ずっと見てきた景色でも、成長によって気づかされたことがある。

私が小学三年生の頃、祖父から沖縄戦の話聞く機会があった。祖父は当時、五歳という幼さ。それでも、鮮明に覚えているようだった。祖父達は、初めに名護を目指し、北へ北へと逃げた。そして、どうにか生き延び、今度は中部、そして、南部へと走った。その他にも、当時の生活のことや戦後の日常、祖父の兄についても初めて話してくれた。祖父の兄は、当時、第一中学生徒。学徒兵、最後には特攻兵として戦争に動員され、航空機から敵の戦艦へとめがけ、十七歳にして人生に終止符を打った。

いくつもの話を知った私はというと、まだ九歳。おとぎ話でも聞いているかのような感覚だった。世界の過去も問題も分からず、戦争はとっくの昔のことで今は平和だ。そう思っていた私は、なぜ祖父は北へと逃げたのに、南部へと戻ったのか、戦後のことを楽しそうに語る祖父の横顔を見ながら一瞬頭をよぎった疑問だけが残った。

それから三年後、祖父は自分の兄の元へと旅立った。私は、中学、高校と進学し、学びを深め、世界の情勢も段々と理解し始めた。小学三年生の『世界は美しい』という感覚は淀んだが、それでも友達に囲まれ、今しかない日々を過ごした。

そんな時、私は友達の話で、祖父の兄と同じように沖縄戦を経験した元学徒隊の方とお話してできる会に参加した。資料とともに約二時間にわたるお話の中で、

「上陸した米軍が首里を目指して攻撃したから、北部へ逃げた。その後、沖縄全土を侵略されるような戦火から南部へ逃げ、戦争の終わりを告げる玉音放送を聞いた。」

とおっしゃった。その言葉を耳にした瞬間、私の脳内では、何年もの時間が一瞬にして巻き戻された。あの祖父との会話。おとぎ話でも何でも無い現実。私の中の沖縄戦への捉え方が一気に現実味を帯びた。続けて、その方の話されたことが資料や祖父の体験談と次々に重なっていった。あまりの驚きと現実へのショック、当時を生きさせた人々の感情が一度にこみあげ、言葉を失った。それをつかの間、『戦争体験者が少なくなっている今、語り継げるのは、あなた達だけです』という熱い言葉で会は終了した。

その日から、私は何度も戦争や平和を真の意味で考えた。どれだけ考えても、考えても、積のる想いは、多大な犠牲に胸を痛め、平和を求めることだった。

何年も、何年も沖縄を学んできた。そしてこれからも。それによって私達は、平和を願う気持ちが一層強くなる。それ以上でも以下でもない気がする。けれど、沖縄戦であった一つひとつの事実、命を知られば、決して忘れない。私が祖父との会話を覚えていたように、時を経てでも、残酷な過去を胸に刻む。平和と戦争が隣り合わせのこの世界で、いざ武力を持ち出そうとした時、このヒストリーが今を生きる私達の心に存在することで違った未来が見られるのではないかと私は強く信じている。

元学徒隊の方がおっしゃった『語り継げるのはあなた達だけです』という言葉。今なら分かる、知ることと知らないことの差。過去を知った上で平和を願うことは、大きな力になる。そして、語り継ぐ重要さに気づいた今、沖縄戦を知りたくても、一番近い存在だった祖父の姿はない。戦争体験者が少なくなっているという止められない危機も身にしみて感じた。

今日、私は、明日に小さな夢と希望を持って眠りにつく。海を越えれば、そうとはいかない現状も知っている。戦争は、より良い未来を描く感情が議論になり、議論がまた感情という名の武力に変わってしまった。最近、平和の脆さもよく感じる。伝え続けることでしか、将来の平穏な日常は実現できない。だからこそ、私は、私の役割を全うしたい。

旧正月、シーミー、お彼岸……。その日は決まって、家族揃って仏壇に手を合わせる。今度、線香を焚く時には、祖父に伝えたい。

「あの時の話、やっと分かったよ。あとね、凜にできること、見つかったよ。」